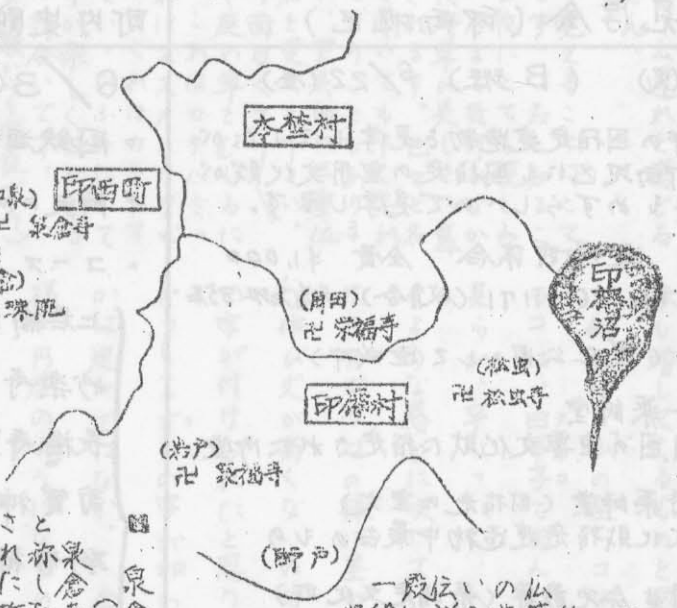
酒々井町郷土研究会会報
第12号
昭和54.7.10.
発行
酒々井町郷土研究会
酒々井町総務部

印西地区の重文を訪ねて

郷土研究会　印西地区見学会　6月19日，22日

三月の古墳地方の古代文化の中心地の見学会につづき今回は身近な印西地区の古代文化、特に国指定重文の建造物を見学。梅雨の真中とはいえ暑さきびしい西日、しかし近隣地区という親しみと時間的なゆとりもあって、訪ねる所説明・案内もいきとどいて充分に満足出来る見学会であった。また今回は新しい方達の参加が目立ち、申込者も一部の方には残念ながら断りするという程の人気で、本会の運営も少しづつ軌道にのってきつつあり……の感じ？

町のバスのクーラーに疲れも汗も忘れてただ〈感謝。それにしても町有バスでは何とも味気なく、トロピカルなネームを進呈したいものと目下思案中也　乞応援。



▣ 師戸城址

印旛沼に突き出た白地上にあり、三方が崖となった天然の要害の師戸城。白井城の支城であり、千葉氏の本佐倉本城の守りの任を果たすべく築かれ白井四天皇の一人師戸四郎の居城であったと伝えられている。印旛沼を一望できる公園完成も近い。

▣ 泉福寺薬師堂（重文）

銀杏の大木が緑陰をつくってほの暗い中にその御堂はあった。室町時代の建築様式をよく伝えている貴重な建造物として、昭和52年3月に国の重要文化財の指定を受けるも、指定後日が浅く、現在の薬師堂は室町の頃よりこれまで民間に伝えられてきたままの姿である。いづれ国の手で解体復原される日も近々であろうと思われるが、歴史の風雪に耐えて静かにたたずむ御堂との対面はものいわずとも心打つものがある。墓石や普門品記念碑が整理され草取る老女の姿があった。

▣ 泉倉寺延命地蔵尊（県指定文化財）

泉倉寺は、はじめ光蔵寺と称したが戦火に会い再興された所。和泉の泉と、小倉の倉をとり「泉倉寺」と改称されたと住職の話。

宝ぎょ造りの堂々とした再建に見学者一同目をみはるばかり……住職の説明は実にユニークで、茶果の接待に緊張感もほぐれて色々の質問も飛び出す。地蔵尊を愛しみ守り続けてきた人だけに説明にも熱が入り、聞く者は仏の世界にしばし導かれてさわやかな思いす。

本尊は鎌倉時代定朝流の仏師の作といわれ形姿とのい仕上がりも隠れまで金箔をおいたていねいなものである。左足を下におろした半跏踏下げの姿で、地元では雨乞いの地蔵として信仰を集めている由。この夏の干ばつには特に祈願の人や多かろうと思いやる。

▣ 宝珠院観音堂（重文）

光堂の名の通り、簡素な御堂の内陣と厨子は極彩色で飾られ、幽暗の中に一燭をもって観音に接する効果設計に天台密教の心を偲う。

▣ 栄福寺薬師堂、厨子、棟板（重文）

棟板銘「寛正七年六月柱立……」が発見されて世に出たこの薬師堂は、県下の重文指定建造物中で最古のものである。境内には寺があり、身居があり、鐘つき堂があり（鐘は不在）、火災採知器が備えられていた。

昭和44年に国により解体復原され、近江の大工の手による室町時代の美しい力や葺き寄棟造りの三間堂は現の世に見事によみがえり、この光更に思づいていく事であろう。

▣ 松虫寺　木像薬師如来坐像、立像（七体）（重文）

坐像を中心に立像が左右両側に三体づつ並ぶ「七仏薬師」は全国的にも作例が少く、貴重な藤原時代の造像である。唇に朱を施し眉や黒目を墨で描いている群像は、病の松虫姫が合掌祈念したという伝説の姿が想われ、かれんである。今年は御開帳の年に当たり「一般公開される由。境内は紫陽花が満開でその一隅に姫の遺骨を埋葬した墓があり、「牛もぐり池」「お杖の銀杏」「乳母塚」等の説明を聞きながら見学。坐像の台座の裏に仏師の「等ならし」というのか、月、日、ひげ等の墨書きを見せてもらったのがおもしろかった。尚この像は姫が祈った時のものではなくその後に作られたという。

第012号（K02）酒々井町郷土研究会会報　昭和54年7月10日(火)

日記ところどころ

押尾翠村記

〔解説〕　この「日記ところどころ」は酒々井横町の住人、故押尾翠村氏が書き残したものである。翠村氏は本名を源蔵といい明治二十五年生まれで、昭和二十二年に五十五才で亡くなられた人であるが、郷土史の研究家として、吾々の大先輩であり、短歌、俳句もよくし、水野葉舟等とも交遊があり、中々趣味をもっていた文化人であった。　この日記には「天明から昭和まで」という附記がついている江戸時代から明治時代中期までの記事は何を参考として書き写したか判明しないが、酒々井の事績について貴重な参考資料である。ここには江戸時代は省略して一般に理解し易い明治元年以後のものを抄録、連載することとした。

（相京晴次）

新入会員の御紹介！

172　和田耕一
173　木村甚
174　伊島仁子
175　友野金吉
176　海野千恵
177　青山久子
178　井村むら
179　石井たみ

暑中お見舞申し上げます

（明治元年）
4月3日　船橋にて戦争有之候
7日　東海道副総督、柳原前光、佐倉城請取に参り候
8日　薩州勢、佐倉城に入り、佐倉村々一同調書差上申候
・内野牧、柳沢牧御廃止、開墾切開申候

（明治2年）・江戸を東京と改め　国中天子様にて相治め申候
・神仏分離令にて別当廃止に相成り申候
7月13日　午前3時より12時まで大嵐と相成り　妙見社内の八把えの松、風折れと相成り申候
11月　勝蔵院不動堂前へ石敷き申候

（明治3年）・東城寺、地蔵院、観音院御廃止
・明治3年より百姓、町人苗字差許しに相成り申候
・佐倉牧廃止に相成り申候
10月25日　妙見社内「八把の松」記念碑を建申候

（明治4年）
7月14日　佐倉藩を廃し「佐倉県」と改め申候
8月　米2俵代金三両一分両銭十一メ百文
9月10日　領分村々名主、組頭、百姓代御呼出右之通被申渡候
殿様東京へ弥々移住ニ付、巳年八月以前の拝借証文御下被下旧領へ金五千両、その内金二千三百五十両は佐倉県へ下され、此節酒々井町、村之内一軒につき金二分づつ被下置候
11月13日　佐倉県を印旛県と改め申候、地頭廃止

（明治5年）
3月　加村県にて御用取扱申候、27ヶ村県令廃止、右の儀は7月5日仰渡され申候。
・佐倉役所廃止、田町御門、大手御門取押い、民間役所加村（現流山市）印旛県と相成申候。
11月下旬　佐倉藩所東京伊藤新兵衛、壱万五千両にて請負、明治8年に出来申候。

（明治6年）
1月4日　太政官布告にて、太陰暦を太陽暦に改め12月3日を1月1日と相定申候
3月　酒々井村町中一軒に付　金八両三分銭三百二十文づつ分金致し申候（ママ）
4月1日　成田山深川へ開帳に御出被成候
8日　高札場取払申候
7月2日　千葉県役所開き御座候　日本六十六県、西は西京、東は東京、大阪を加えて三府、交易場は　西は神戸、東は横浜に限り申候
7月28日　加村県、千葉町妙見寺に引移り、佐倉県に相用申候

（以下次号）

志水合戦

沖田善三郎

『東国戦記』という本があります。著者不明で、主に常州下妻城主多賀谷氏歴代に就いて書かれたものですが、同時に周辺の戦国時代の事跡を記した戦国物語であります。その中に「志水合戦ノ事」という一章があります。いまそのはじめの方を記してみますと

「去ル程ニ相馬小治郎ハ志水近ク神奇、敵ノ様子ヲ窺ヒケルニ、原式部大夫大将トシテ直瓜七郎、高橋九郎左エ門、津田與七郎、原玄蕃、島津七郎左エ門、其外一千五、六百騎程ヘ居タル様子ナレバ、イザ追散ケント鉄炮ヲ打掛ケレバ待儲ケタル　佐倉勢一ノ木戸ヲ押開キ、一番ニ直瓜七郎二百騎ヲ引具シ鉄炮ヲ打懸ケ煙ノ中ヨリ突テ出ル」といった調子の本です。志水はもちろん現在の「酒々井」のことです。

その概略を述べますと、常陸国足尚の城主関見中村が小田原北条氏の指令で千葉方を攻撃することになり、原胤下総の守という智将と総大将として布川へ（茨城県）方面から千葉坂崎小金の軍勢を従し千葉方の各城に攻撃をしかけて来ました。総大将原胤下総守は七千五百余騎を引きいて布川を出発し先づ笠神（笠神村）の城主原肥前守を降参させ肥前守を案内者として吉高から大欲に打出り猶不に上座志水の原に本陣を据え、公津の城には別動隊をさし向けました。

合戦の有様は講談師の講釈ではありませんが、まるで見て来たように記されております。

千葉方も勇猛果敢に迎へ撃つのですが残念ながら敵の計略にかかり陥し穴に大将千葉頼胤以下落込み生捕られるという結果に相成り佐倉城主（本佐倉城）千葉国胤も病気中のことと終に降参という破目になったことになっています。

この物語は史実とは矛盾がたくさんあります。原胤下総守長男の立場から書かれたいわゆる軍記ものでかなり調子よく書かれています。一応の参考としてみるべきでしょう。

この時の千葉方の備えに就いて次のように記しております。

佐倉城（本佐倉）　千葉介国胤
合志信濃守親胤を大将として
城中の諸士　三千余騎

白井城　千葉東六郎勝胤を大将として
東飯原左エ門　同六郎
東井若狭　山野辺源太左エ門
藤田　藤崎　等一千余騎

泉元城（八千代市）　原縫殿之助、神保蔵之助を大将
中根八右エ門、原兵部　平井
高橋、桜井を始め五百余騎

武石城（千葉市）　武石三郎　同左馬之助
久留里三郎右エ門　大野若狭
伊藤治郎右エ門　其外八百余騎

物部城（深志）　原美濃守を大将として
原刑部　岩井修理　原民部
龍眼寺の悪僧等七百余騎

笠上城（本埜村）　原肥前守を大将として
河村出見、同七左エ門、中根
主殿　岩井弾正、小林十郎左
エ門、平岡甚内、後藤作左エ
門を始め兵勢五百余騎

公津城　千葉敬正を大将として
多目平四郎、岡田弾正、吉岡
越前、原原長門、伊藤平治右
エ門　伊藤太郎　同治郎
炯屋右エ門、其外　本間、高
野、日下部　等八百余騎

滑川城　織田左京太夫　七百余騎

助崎城　丙田信濃守　五百余騎

大須賀城　大須賀左衛門尉張守　伊藤左近将監　天
林大郎　大須賀左右エ
門、同清左エ門　森九八郎等を
始めとして長沼の五郎、荒
海、大竹、石橋等二千五百余
騎。

以上、人名其の他事実かどうか調べようがありませんが、当地方の地名と姓として名乗る人達、或は現在も多く見受けられる苗字の人達、何となく身近かなものに感じられるので参考までに書抜いてみました。

四月十四日
野草の会にて
（馬橋永生住居址発掘見学）

春はよし野草の会のたどる路
青葉若葉に野辺の花々
山なみに点々白き山桜
咲けなわの山裾を行く
道の辺の草の名学び花を見て
しばし吾が身の怒い忘れる
馬橋なる住居遺跡を訪ぬれば
貯蔵用の穴光りおり
掘り下げしかこいのはにまざ
まざと住める跡見ゆ遠き昔の
謎をとき古代の生活語る人
言葉も熱も熱をおびけり
開発にけづり取られて向山
墓の日中に青一つなし

御厨高一

第012号（No4）　酒々井町郷土研究会会報　昭和54年7月10日（火）

7月から 郷土研行事計画 9月まで

本お申込みは
おはやめに
96－1171
までどうぞ

昭和54年	7月	8月	9月
古文書学習会	7/7（土） PM 1:30　青年研修所	8/11（土） PM 1:30　青年研修所	9/8（土） PM 1:30　青年研修所
石仏調査	休	8/19（日）　酒々井方面 ◎雨天中止 PM 1:30　研修所集合	9/9（日）上本佐倉方面 ◎雨天中止 PM 1:30　研修所集合
野草の会	7/14（土）　佐倉（草笛の丘） PM 1:00　京成佐倉北口集合 （帰途はバス利用） ◎雨天　7/21（土）実施	休	9/15（土）（岩名仁王尊） PM 1:00　京成佐倉北口集合 ◎雨天中止

夏の郷土史講座

8月21日（火）　雨天決行

（千葉）加曽利貝塚
猪鼻山城
千葉寺
県総合運動公園

※　AM 8:30　役場集合
会費　¥1,000（昼食含）
町のバス使用，先着35名
申込み　(96) 1171（教育委員会）

町外史跡見学会

〔A〕9月18日（火）　〔B〕9月21日（金）

神崎西の城貝塚～笹川繁蔵の墓
猿田神社（銚子）～常世田薬師如来（銚子）

※　〔A〕，〔B〕各班　先着順　35名
会費　¥1,000（昼食含）
AM 8:30　役場集合
町のバス使用
申込み　96－1171（教育委員会又は相京まで）
雨天決行

会計報告

5/25　昭和の森植物観察会

〔収入〕	会費	(1,000 × 29)	29,000
〔支出〕	バス代		8,000
	弁当	(400 × 32)	12,800
	茶菓代	(200 × 35)	7,000
			27,800

差引残金 ¥1,200 は郷土研会計へ繰入れました

6/19，6/22.　史跡見学会（印西地区）

〔収入〕	会費	(34+32) × 1,000	66,000
〔支出〕	バス代	8,000 × 2	16,000
	弁当	(37+39) × 400	30,400
	茶菓代	(37+39) × 200	15,200
	拝観料		15,000
			76,600
			△(10,600)

差引不足額 ¥10,600 は郷土研会計より支出

俳句

ひばり鳴く峡へ坂道大曲り
辛夷はや咲け峡田の何ふ山
峡田振ぶけ昏らんまんといふ眺め
揺れ交はすリズムゆるやか葱坊主
野地蔵におのずから供華壹すみれ
麦笛の記憶が里穂探させる
目高パッと散りし幻覚風光る
一枚の板が架かりて真菰生ゆ
金鳳華鋤き返されしまま咲けり
緩張って発掘現場　山ざくら

守佐見春坡

導橋の埋蔵文化財発掘見学にて

（後記）

チャボにひながかえりピーコと呼んでいます。親鳥の情の深さにはただ〳〵感動するばかり。目下鳴き声を聞き分けてネコ野郎を追いたてることを唯一の消夏法！　として何とか12号を御届けする事が出来ました。

「酒々井町の家紋」と本佐倉城址のパンフレットと同封致しました。調査に御協力いただきました方々に苦労様でした。

入院していますとても世話になった人が重い病気でいまは面会謝絶でお見舞も出ません。暑さに向かいます折りから皆様もどうぞご自愛の程祈ります

(M)